浜松っ子の心意気と伝統を〝まつり〟でつなぐ

貨物鉄産労東海地区本部
静岡支部中部分会分会長　鈴木 智久さん

5月3日午前10時、遠州灘に面した中田島砂丘――開会宣言の花火の音とともに大凧を掲げ持った町衆たちが風を求めていっせいに走りだす。「浜松まつり」の幕開け、凧揚げ合戦の始まりである。2019年は市内174町が参加。その中の一つ飯田町の組長が鈴木智久さんだ。

凧揚げの醍醐味

この地に吹く強い風は「遠州のからっ風」と呼ばれる。取材当日も強い風が吹いていたが、鈴木さんいわく「遠州のからっ風はこんなもんじゃない」のだそうだ。

浜松まつりは、一説には永禄年間（1558～1569年）、浜松城主飯尾豊前守が長男の誕生を祝って凧を揚げたことが始まりとされる。その後、風と相性のいい凧揚げは地元のまつりとして定着。1950年に「浜松凧揚げ祭り」は「浜松まつり」に改称された。

「浜松まつりは凧と練り（練り歩き）と屋台（山車）。でも、やっぱりメインは凧揚げです。大空にさまざまな意匠の大凧が舞い上がる様子は壮観ですよ」

地域の行事やボーイスカウトでも凧揚げはやっていたが、鈴木さんが浜松まつりを意識したのは中学生になってからだ。ただし、鈴木さんの住む飯田町は新規町内だったので当時はまつりには参加していなかった。

「小学生までまつりは観るもの。参加するものじゃなかった。中学で旧町内の同級生から糸切り合戦の話を聞いてやってみたいと思いました」

互いの凧の糸を絡ませ、摩擦によって切り合う糸切り合戦は想像以上に荒々しい。凧の大きさは10帖（一辺3・64m）までと決められているが、合戦には4帖（一辺2・4m）か6帖（一辺2・9m）が適しているという。糸の太さは直径5ミリ。糸というより綱――これを引いて大凧を操り、他の凧の糸を切るのである。

鈴木さんは高校卒業後、「いっしょに出ようぜ」と友達に誘われ、旧町内の一員としてまつりに参加した。

「初めてのまつりは〝活気〟の一言。血湧き肉躍る体験でした。初子祝いの家を回る練りも楽しかったけれど、やはり仲間とエネルギーを爆発させることのできる凧揚げが浜松まつりの醍醐味ですね」

1989年、飯田町もまつりに参加したが、鈴木さんが「飯組」という町紋の入った半被を着たのは、その数年後の23歳の時だ。

「旧町内で、初子の祝い凧の糸目つけの儀式をしているとき、ふと自分が結婚して子どもができたら地元で祝いたいと思ったのです。やっぱり初凧を揚げるなら子どもの名前と飯田町の町紋が入ってなくちゃね」

まつりの裏方の仕事も心得てはいたが、初凧の糸目つけや包み方などは各町内で少しずつ異なる。その町内の流儀があるのだ。だから、鈴木さんは最初の1年間は飯田町の町衆のひとりとしてまつりに参加した。そして2年目、「せっかくやるなら本格的に参加しよう」と決意する。

「襷（たすき）を掛けて役員として地元の人たちといっしょに働きたいと思った。でもね、町内ごとに流儀があるから最初は戦力になれたかどうか……」

鈴木さんは謙遜するが、1年かけて行われるまつりの準備にはさまざまな仕事がある。特に4月の会所開き後の実行部隊は大忙しだ。初凧の糸目つけ、半被やワッペンなど販売用グッズの用意、凧の購入や修理、凧揚げの練習……。ラッパの吹ける鈴木さんの参加を一番喜んだのはラッパ隊で、子どもラッパ隊の指導も引き受けた。凧揚げや練りを盛り上げるラッパの音は、まつりの名物でもある。

「ラッパは音が出れば嬉しいから、どんどんうまくなる。子どもは唇が柔らかいので1週間で吹けるね。僕は1年かかったけど（笑）」

浜松まつりは何といっても凧揚げ。威勢のよい掛け声とラッパの音に観客の歓声が交じる。

浜松では「おまつりラッパ」といわれる軍隊ラッパ。特に市民に馴染み深いのは「駆け足行進」。

町それぞれの意匠を施した御殿屋台の引き回し。
太鼓、鼓、鉦、笛…子どもたちのお囃子がまつりを盛り上げる。

「凧は一人じゃ揚げられない」――飯田町の熱い心とプライドが一つになる。

実は、中学2年生の鈴木さんの息子も幼稚園のときからラッパを吹き始め、今はラッパ隊の一員である。メロディは軍隊の「駆け足行進」をアレンジしたものだが、浜松っ子たちはこの旋律をいつのまにか覚えてしまっている。なぜなら、4月になると、土・日曜日には子ども会で練習するラッパの音が町に響き渡るからだ。

地域をつなぐ

令和元年となった2019年、鈴木さんは浜松まつりの飯田町組長になった。任期は2年間。凧、練り、屋台、鳴り物は各副組長に任せるが、最終的に飯田町の参加者大人500人、子ども200人を束ねるのは組長である。まつりの終了時間、けがや事故はもちろん、「うちの凧の糸を跨いだ」とか「糸が絡んで凧が落ちた」などの揉め事も諌めなければならない。こういったなかで鈴木さんが最も気をつけているのは自らがまつりを楽しむことだという。

「役員が笑って参加できないおまつりは参加者も楽しめない。僕が怒った顔をしていたら、つまんないじゃんねえ（笑）。準備中は目をつりあげているけれど、本番は仲間の働きを信じて、少々無理しても笑顔でいるというのが僕のコンセプトです」

一番ハラハラしたのはまつり2日目。雨模様のなか屋台の引き回しを行うか否かの判断だった。子どもたちが濡れてしまうのは困る。スマホの天気予報レーダーを睨みながらスタート30分前に決行を決めた。近隣町内はみな取り止めたが、雨は降らなかった。この決断のときも鈴木さんは笑顔だったと思う。

「まつりは大成功？　いや、もう1年組長だから、まだ半分。浜松には、こんなにすごい伝統行事があるんだと自慢できるよう、下の世代に引き継いでいくのが僕らの使命ですね」

鈴木さんは初日の糸切り合戦に参加。浅田町や砂山町など5～6町が絡む乱戦のなか2～3町の糸を切った。大凧を操る〝飯組〟の背中に魅せられた若者も多かったにちがいない。

浜松まつりの概要

浜松市の都市まつり。一説には、永禄年間（1558～1569年）、城主飯尾豊前守が長男の誕生を祝って凧を揚げたことがルーツといわれ、初子の誕生を祝う初凧、糸切り合戦で知られる。絢爛豪華な屋台引き回しも見もの。

開 催 日　毎年5月3・4・5日
開催場所　浜松市南区中田島砂丘